

義太夫

昭和六十一年 通常総会終了

吉川英史氏名誉会長に
新会長には田辺秀雄氏

去る七月六日、文明堂築地店にて昭和六十一年通常総会が開かれました。六十年度事業報告・収支決算報告、六十一年度事業計画・収支予算案は全て異議なく承認、任期満了に伴う役員の変更が、選挙管理委員会（委員長―景山正隆、委員―池田弘一、竹本素丸、水野悠子の各氏）立合のもとに行われました。当日は、衆参両院のダブル選挙の投票日でもあったため、義太夫協会ではトリプル選挙という印象に残る一日。

席上、昭和四十五年の社団法人設立以来の吉川英史会長が辞意を表明、田辺秀雄新会長が新たに選出されました。新旧会長の挨拶のあと、田辺新会長より「吉川前会長を名誉会長に推薦したい」旨の動議があり、満場一致

で承認。豊澤仙廣前副会長（義太夫節保存会会長）のユーモラスな挨拶「今ならいいですよ。十六年前のあの悲惨な悲惨な時に、立派な方に会長をひき受けて頂いた、そのおかげで今日の義太夫協会があるので。名誉ひとつじゃ足りないくらい、吉川名誉会長長であります」笑いの渦の中で握手そして拍手、義太夫協会は新たなスタートを切りました。

総会及び理事会・常務理事会を経て、新役員・各業務分担が決定、今後三年間次のメンバーで運営することになりました。何卒よろしくお願ひ申し上げます。（尚、二、三の方に重要なポストをお引受け頂きたくお願ひしておりますが、ご承諾あり次第、御報告申し上げます。）

義太夫協会会報
第 38 号
昭和 61 年 8 月 12 日
社団法人 義太夫協会発行
〒104 東京都中央区銀座
6-18-2 新橋演舞場 B2
TEL (541) 5471

役職一覽 (各五十音順)

会長	田辺 秀雄	理事	豊澤 幸治
副会長	竹本 朝重		野澤 吉平
常務理事	竹本駒之助		野澤 錦輝
	竹本綾之助	監事	景山 正隆
	竹本 越道		佐々木 明郎
	竹本 弥乃太夫	相談役	豊澤 猿三郎
	竹本 綾一		
	竹本 綾太夫	名誉会長	吉川 英史
	竹本 扇太夫	名誉会員	竹本 土佐廣
	竹本 駒龍		豊澤 仙廣
	竹本 春華	事務局	竹本 綾太夫
	竹本 土佐恵		水野 悠子
	竹本 素八		
	鶴澤 寛八		
	鶴澤 駒登久		
	鶴澤 重輝		



とで、「婦系図」の早瀬主税の「月は冴ゆれど心は闇だ」の心境とは逆に、「空は梅雨曇りでも、心はさつき晴れ」となったのです。

在任中私の心の支えになったのは、第一に、副会長豊澤仙廣さんの協会と義太夫に対する物凄く熱意でありました。その熱意が会員に対し、時に叱咤激励となりますので、気の弱い私などはハラハラしたこともありませう。しかし、あの熱意と物心両面の援助がなかったら、私がどんなに頑張っても、今日の義太夫協会は存在しなかったでしょう。

第二の支えは、事務局の有能なことでした。日本の政治がうまく行っているのは、大臣が偉いからではなく、各省の官僚が有能だからだと申します。協会の事務局も、義太夫のことに精通し、会員のことをよく理解した人が、公平な態度で事務を進めてくれたので、私は大過なく会長におさまっていることができたのだと思っています。

そして、役員の方々が私の意見を心から傾聴して下さり、私の決定に気持よく賛同して下さったので、協会の運営は実にスムーズに行われたことは、誠に有難いことでした。

特に嬉しかった思い出としては、竹本土佐廣さんが女流義太夫の人間国宝第一号になられたこと、義太夫協会を母体とする義太夫節保存会が、同類の邦楽団体にさきがけて、重要無形文化財の団体指定を受けたこと、私が永年頭に描いていた企画「女流義太夫の今昔」が、国立劇場の舞台で実現して、好評を博したことなどです。

自分が出演した公演のことを自分でいうのも気がひけますが、「教師のための義太夫講習会」はいつも満員で有難く思いました。殊に竹本義太夫の人と芸を、やや講談調で話しました時は、釈台を前にして、生まれて初めての肩衣を着用いたしました。一生忘れ難い思い出になることでありませう。

私が残念に思いますことは、義太夫協会に歌舞伎義太夫の協力が得られなかったことでした。私は会長就任以来、義太夫協会は女流義太夫協会でもなければ、東京義太夫協会でもないということ、折にふれて申してきまして。本牧亭の公演毎に出される「女流義太夫」という幟にも、心から賛成はできかねました。

何とかして男性の協会にも出演して頂きたいと思いましたが、舞踊の地の方の男性義太夫家竹本喜久太夫さんが例外的に出演して下さったり、同じく竹本弥乃太夫さんが義太夫教室の教師として協力して下さることはあっても、遂に歌舞伎義太夫からの協力は得られませんでした。——というよりも、女性と男性と協演の企画をすることができませんでした。

その最大の原因は、現在本牧亭の月例定期公演は、毎月二十日、二十一日と決まっていますが、歌舞伎義太夫の方は、松竹のスケジュールに縛られているので、日程が噛み合わぬということにあります。この点を解決するためには、男性の歌舞伎義太夫の都合を優先して考慮して、日程と会場を決めるより外に

方法がないかも知れません。その点を解決して、解説を周到に用意して、名曲による本行（人形浄瑠璃）と竹本（歌舞伎義太夫）との比較鑑賞を実現したかったです。そうすることによって、ややもすれば竹本を本行からくずれたものとして不当に軽視される不名誉を払拭することができはるはずですが、また、こういう企画は、芸術祭の受賞の可能性が大きいことを確信します。義太夫協会でなければ実現できにくい企画でもあります。

義太夫協会の皆様、どうか新会長を迎えたこの際、心を新たに協会と義太夫の発展のために大いに頑張ってくださいようお願い申し上げます。

十六年 義理人情にささえられ
つとめし役を終る夏かも



会長就任御挨拶

義太夫協会会長 田 辺 秀 雄

今回吉川英史前会長の御推薦により、当義太夫協会の会長をお引受けすることになりました。私は幼い頃から邦、洋、東洋の音楽教育を受け、若い頃は洋楽評論を職としていた時代もありましたが、その間も社団法人東洋音楽学会で邦楽や民族音楽を研究、特に文部省（後に文化庁）の芸術祭その他音楽部門の相談を受け、戦後一時は壊滅寸前の邦楽界に活を入れるべく努力して参りました。昭和四十五年よりは東海大学に新設された芸術学科で日本音楽の講義を担当しております。

しかし義太夫の社会に対しましては今迄余りお付き合いがなく、もともと非才の身ではあり、この重責を全うし得るかは自信もなかつたわけですが、先輩のたつてのお勧めもあることであり、また協会の役員や、事務局の方々のご好意にまかせて承諾することに致しました。幸い景山正隆氏その他の友人の協力も得られ心強く思っております。

申すまでもなく、義太夫節は語り物音楽の代表として日本近代音楽の華であり、まことに重要な文化財であります。私の考えでは、音楽というものは、文学と結び付き声楽的な発展形態をとったものと、言葉には余り関係なく器楽的な発展形態をとったものとの二つ

に分けて考えられると思っております。前者はアジアに多く見られ、特に日本の中世以降の音楽では最も頂点に達したものであり、後者は欧米を中心として発達したいわゆる洋楽がこれに当たります。これらは音階やリズムその他の音楽理論が異なっているのですが、その話は省略します。その前者を最もよく現しているものが、日本の語り物音楽即ち浄瑠璃であり、しかもその代表とされているものが義太夫節というわけです。

これはもとより人形浄瑠璃としての発展を欠かすことは出来ませんが、また歌舞伎や舞踊でも不可欠のものであり、特に素の音楽としても昔から多くの愛好者を持っておりました。私の父や祖父たちの思い出話では、明治時代のインテリの間に如何に当時の娘義太夫が流行したかを聞いていますし、数々の素義の微笑ましい話なども、今日では落語に残っている程です。

私は、先人達が大変苦勞して作り上げ、世界にも誇るべきこの語り物音楽の粋を、ここで失ってはならないと思えます。その為にはこれを広く世間に知らしめ、この素晴らしい音楽を一人でも多くの人達に楽しんで貰い、また若い世代に受け継いで行かせたいと思

います。幸い、義太夫界の皆様たちが、こうしたことで一致して協会を盛りたてておられますし、また若い有望な新人たちも少しづつでも出てきているようです。またそれに対し文化庁でも物心両面の援助が期待されております。何とか理屈をならべるより私自身義太夫節が好きで、面白くと思えます。何かとお手伝いが効果あればと思っております。

文化財保護審議会専門委員
社団法人東洋音楽学会名誉会員
財団法人日印協会理事
東海大学芸術学科講師

紫綬褒章（昭和五十三年）
勲三等瑞宝章（昭和六十年）



新小松の前で（右から）佐々木明朗監事・松尾武市常任相談役・田辺秀雄会長・豊澤仙廣前副会長・吉川英史名誉会長

吉一（清一）の忍と

昇菊・昇之助の不行儀

相談役 豊澤 猿三郎

浅草の東橋亭は朝十一時〜四時、夜五時〜十時の二部制でした。大正の初め或る日、昼は組幸・吉一（清一）の一座、夜は播磨太夫猿之助（五世）の一座でした。その一座の口語りは播路太夫、三味線は猿太郎（岡太夫）猿治（猿三郎）の一日替りです。猿之助も星の女義が組幸・清一の様な立派な真打の時は、若い者を早く楽屋入りさせて聞かせます。蛸殻町の稽古場を二時に出て、新大橋から一銭蒸汽（本当は三銭）で吾橋橋で舟を上ると目の前が東橋亭です。丁度真打一段が聞けます。組幸・吉一の太十が終って楽屋へ降りるなり組幸が年上の吉一に怒鳴り付けました。「へ二世も三世も女夫ちゃと、のチン、ありやなんだんね。わてのような不器用な者はよう語れまへん。明日蛸殻町の師匠（五世猿之助）に聞いて来なはれ。」吉一は何も言わずハイハイと受けていました。明朝吉一は師匠に昨夜の事を話しました。猿之助は、「組幸の様などぶとい太い声の時は、へ二世も三世も女夫ちゃと、これはおまはんのえ、音させて弾き、

合の『チン』は大きくガツン弾いて、へ思うて居るに情ない、迄を美しく、又『チンツン』をガツンとくわして見や。」と教えました。その日猿治が楽屋入りした時は中入りでした。客も多いので中入りも時間がかかります。その時組幸が突然、「チン、聞いてきなはったか、一寸弾いて見なはれ。」吉一は猿之助に教わった通りガツンと弾きました時、組幸は跳び上りました。「それやがなそれやがな。そのチンを待ってましたんや。わしのきのこの悪態、怒りもせずよう研究してくれました。蛸殻町はん有難うございます。吉一さん有難う。」と手をかたく握りました。吉一の眼に何か光る物が流れました。その頃より吉一の芸は、猿之助と小清のシゴキに依って益々群を抜き、重視される様になりました。

ヤ義太夫狂で、義太夫がかゝれば上下をとわず、ご自分の経営する山形ホテルに泊め、大層な尽力をします。太夫元は山形へ行けば雑用は安くしてもらい、ご祝儀は沢山入るしホクホクです。明治の終りに昇之助・昇菊の一行がかゝりました。野々村では両名と母親を蔵座敷へ住まわせました。山形で蔵座敷へ通すのは最高のもてなしを意味するのです。その初日の夜、二人の母親が急死しました。ちゆう女はまるで我が事の様莫大な費用をかけ、通夜・葬儀を出し、翌日返り初日を出しました。地元では同情と野々村の声がかかりで割れる様な日延でして打上げ、一座は帰京しました。それきり昇之助・昇菊からハガキ一本来ません。噂に聞けば、この二人の芸妓時代にもいろいろ面白い話があります。又後年豊澤竹子が山形へ住みつき稽古場を初めましたこの時も、ちゆう女は献身的努力して上げたのですが、これも土地の人と嬉しい仲間となりドロンしました。竹子のこういう話は諸々で聞きます。その為ちゆう女は女義を見直す様になりましたが、遂にその事は話しませんでした。そして先年天寿を全うなさってご他界遊ばしました。話はこれで終り。義太夫協会の数十名の若い方イヤ年上の方も、この昇之助・昇菊や竹子の様世の中へ不行儀や恥のかき捨てはしないよう吾人共に気をつけましょう。

この度も敬称を略しました事をお詫び申します。それでは今日はこれまで、ご退屈さま。

談 芸 廣 佐 土



(竹本伊達子時代)

前号にて予告いたしました「土佐廣芸談」お待たせいたしました。紙面の都合もあり、かつて本会報に掲載した内容と重複する部分は割愛いたしました。どうか御了承下さい。第25号(57年8月20日発行)第26号(57年10月20日発行)を御参照頂ければ幸いです。

* 昭和61年1月20日 本牧亭にて公開録音
* 聞き手—吉川英史 * 司会—葛西聖司
(文責—水野)

入門のきっかけ・動機

当日の司会担当、葛西聖司NHKアナウンサーの自己紹介に続いて……聞き手の吉川英史会長(現・名誉会長)より
吉川 葛西さんは「濡つくし」のナレーターとしてお馴染みだったと思いますが、現在は「勝ぬき歌謡天国」の司会で大変有名になられました。幸いに義太夫教室38期の生徒さんでありまして、義太夫というのは義理・人情を重んじますので、葛西さんは多分私共がお願いすれば断られないだろうと、もう何年かいたしまして鈴木健二さんのようになられますと、なかなかお頼みしにくいので今のうちに——という心づもりでお願いしておる訳でございます(笑)。土佐廣さんは昨年の秋、勲四等宝冠章をお受けになりましたので、私共でその祝賀をと申したのですが、御本人が余り晴れがましいことはしてくるなど仰しやるので、土佐廣さんの活躍の本場であるこの席に於て何か意味のあることを、と今回の催しになった訳でございます。

吉川 女性が義太夫の道に入るといふのは、まあ普通ではないと思うんですが、土佐廣 父が大変浄瑠璃が好きで、かなりお天狗だったんでございます。父は悪声の人でしたんで「阿漕」とか「播州皿屋敷」とか「佐倉惣五郎子別れ」とか、そんな物ばかりやってまして、私も「佐倉惣五郎」のおさんのサワリなんかを真似して口ずさんでおりましたんです。その内にちょっと一節教えてやってくれと父が師匠に申しまして——鶴澤勇造という大部高輪のおじいさんでしたけど——「三つ違いの兄さん」を教えて頂きましたら、踊りや端唄よりは芸質がよさそうで「これが一番ましらしいから仕込みなはれ」といわれまして手ほどきをやって頂きました。

それで今度は、父が大変崇拜しておりました天下茶屋の伊達太夫師匠へ連れていかれまして——早速、伊達子という名前を下さいました。初舞台は、一年程しましてから、キタ

の天神様の裏門に「南歌久」といふ席がございましたけど、そこへ「露払い」といって一番最初に出ました。切を語る人はミナミと掛け持ちなんです、一寸距離がございまして、必ず間に合わなくてトチるんです。そうしますと間があくものですから、私にツナギをやれってその親方がおっしゃって、それが殆んど毎日のようにで、終いにツナギ太夫って言われました。で、やりますと五銭、今の若い方は御存知ないかもしれせんけど、五銭頂くんです。で、裏門の中へ入りまして、今でいうたい焼みたいな物を売ってしますので、それを五銭で買って食べるのが楽しみで、殆んど毎晩のようにツナギをやっておりました。わりかた小さいのにこまっちゃくれた浄瑠璃語っていたらしくて、それが又、お客さんには一寸面白かったとみえまして、大変うけますんです。それで今度は、ミナミの方の今の弁天座の所だったと思えますんで、竹田の芝居ってのがございまして、その横に「竹横」っていう丁度この本牧亭くらいの席がございまして、その親方が「うちにいせ、いせ」いうてみえます。父がもう親ばかです。天狗になってまして「うちの子はそんな前なんかやらしまへん」「いや、前と違う。真中のえゝ所でやらすよって出しないはれ」それでミナミの「竹横」へも出るようになります。それで別看板で、これ位(注・新聞紙二頁位)の別看板に(はにかんで笑いながら)天才少女なんて書いて貰いました……そこで少し人気がございました。そのうちに神戸の方

1986. 8. 12

からも京都の方からも――

吉川 ちよっとお待ち下さい。これでは私共二人が商売になりませんので(笑)合の手を入れさせて頂きます。修業時代、伊達太夫さんの稽古のことなどを――。

修業時代・伊達太夫師匠のこと

土佐廣 天満橋から天神橋までの間を八軒家っていったんですが、相当距離がございませぬ。何も乗物がないんですからテコテコ、テコテコ歩いて、その間が長いんですよ、道頓堀へ出ますまでがね。ちよっと須田町から銀座・新橋辺までございませぬ。それから、夷橋っていう所からまた、ここ(本牧亭)から須田町まで行く位歩きますと、やっと南海電車ってのがございませぬ。やっとそれに乗って三つ目が天下茶屋なんです。稽古場が二階になっておりましたけど、二階が駅からよく見えませぬ。

吉川 そこまでは合計すると六キロ、一里半位なんです。

土佐廣 そうですね、電車に乗るまで。それを全部歩くんです。

葛西 朝は何時頃からですか？

土佐廣 もう五時に起きまして、弾き語りで寒稽古をさせられるんですね、縁側の板の間どころへ小っちゃな座布団敷いて、淀川によう船が通ってんのがよく見えました。前に将棋島っていう、ちよっと将棋の駒の形をした島がございまして、鯉釣ってるのがよう見えませぬ。そんな見ながら、弾き語

りで、手が冷とうて冷とうて。それが済みませぬとお茶漬食べて、それからコツコツ歩いてお師匠さんの家まで行く訳なんです。

その時分は文案が八時から始まってまして、ですから師匠のお役の早い時には九時半か十時頃にはもうお出かけになります。師匠は大変驚がお好きで、餌をやる間、ちよっと時間がかかりましたり、お茶人でしたからお茶のお稽古したり、その間じつと。むろん火鉢もございませぬし、布団もございませぬ。寒い間じつと待って、トントンと足音がすると、ア、お師匠さんが上ってらしたのかなと思うと、足音が向うへそれしてしもうて。また本をじつと見て、それで今度の足音はそうかなと思うと、女中さんが「今日はお休み」っていうて。文案へみえる時間になったから今日は休みていわれて「へー」言っただけで帰ってくるんです。

葛西 それだけ時間をかけて行ってもお稽古をつけてもらえない日もあった訳ですね。

土佐廣 それがもう大体毎日のようですね。それで、おかみさんが「稽古ちよっともしてやらんと可愛そうな」っておっしゃたら「何言うてんのや、家の敷居またいだら勉強になつてんのや」……「どうして敷居またいだら勉強になるのやろなあ」思うて、その時分は自分で理解できませんでしたが、あとから成程なあと思いました。そんな事で、三日目か四日目に一ぺんしか稽古して頂けないんです。

土佐廣 長いこと道、歩いてましてね、他の事は全然頭になくて浄瑠璃のことばかり。今習ってる物ばかりかし、それが頭を離れない訳です。それでや、と思ひます。

学校へも行ったんですけども、お稽古の方が忙しくって、勝手に学校をやめてしまひまして……学校へ行っていないんです。

吉川 伊達太夫さんは、大変風流な師匠だったそうですね。

土佐廣 お茶の先生とか絵の先生とかお見えになって。掛軸も大変お好きだったし、品の良い方でした。後藤象二郎っていう政治家の所で書生をしてらして、それであんまり義太夫ばかり口ずさんでるから「そんなに好きやったらもう太夫になりいな」って言われて、それで入られたのが十六、七の時だったらしいですね。ですから中年からなんです。みんな子銅いから入ってる人が多いのに、師匠は中年からですから、随分苦しい思いをして、苦労したって事も聞いております。

吉川 風流な師匠におつきになって、何か得をしたとか感じられる事はございませぬか？

土佐廣 そうでございませぬ、やっぱり師匠のお好きだった、わかりませぬけどもお掛軸を見たり、お茶も一寸、間がなくても習いに行きましたり、絵も字も習いかけたんですけど、その先生達みな戦災で亡くなってしまひまして、それっきり習っておりませぬけども。

葛西 伊達子という名前は、伊達太夫さんが大切にしていた名前、なかなかお弟子さん

には下さらなかつたそうですが、どうしてそのいい名前を頂けたんですか？

土佐廣 何かあの…自分じゃ言いにくいんですけれど、子供の時分…、可愛らしかったらしいんで(笑)、可愛らしい弟子が入ったらやるっていうて、残してあったらしいんです。葛西 先輩が沢山いる中で、いじめられたり、妬まれたりしませんでしたか？

土佐廣 そんな事もございませんでしたけどね。とにかくお稽古の時、みんな先輩の人、覚えないうです、それで私はあんまり叱られた事ないんです。ただ「婆みたいな浄瑠璃語る」って言われただけで…。「先代萩」を習いました時には「政岡にならない。そこらにいるおかみさんみたいな」っていうんで、それはもう大分苦勞いたしました。子供ながらに、こうかしら、あゝかしらって思っています。それで、こうかしら、あゝかしらって思っています。それと「そんなに堅うなってしまうたら、栄御前が出てきたらもう、物言われんようになってしまふ」って言われるんです。それで随分やかましく言われましたのが、一番怖かったです。それと、千松が唄歌う所がござい

ますね。「千松は七ツやで、七ツの子がそんな上手い事言うたらイカン」って言われるんです。それでもマア上りました時には、師匠にお客さんがございしましたら、そのお客さん連れて来て「聴いてやっておくんははれ」なんて言うて、そんな事もございしました。

そんなン知りまへん

葛西 その当時、楽屋では色んなお仕事もあつた訳ですね？

土佐廣 え、東京のように箱屋さんがいないもんですから、何もかもやらんならんです。その時分はね、燭台があるんですね、真中に一つと両端と。で、その時分のろうそくは燃えかすが溜まるんで、溜まってきたすとね、芯を切りに行くんです。左手に入れるものを持って、右手に挟むものをもって。それがね、挟みすぎると消えてしまふんです。うしたらなかなか点かないんですよ。芯が短こうなってしまうましてね。それで、もう一本のろうそくを火種にして点けたり、マッチで点けたり、長いことこんなことしてると、下りて来たらエライ怒られるんです。語るのに大変邪魔になりますからね。ですから、ろうそくの芯が一人前に切れたら、もう一人前やなくて、よくね、言われました。

*

土佐廣 とにかく用が多いんです。何もかもみませんなりませんですから。やかましくて人使いの荒い人がありましてね。私、その方の湯呑みを割りましたの。で、こんなやかましい人の湯呑み割って、これ謝まらんならんのイヤやなあと、思っ、けれども、どうしても謝まるのがいやなんで、どうしようかしらんと、思っ、新聞紙にそのかけらを包んで、天満橋渡って家帰るんですけど、天満橋長いですね。その天満橋の上から川へ…：ほおっっちゃったんです。(笑)

吉川 アラアラアラ…。

土佐廣 で、翌日行きましたらね、「あたしの湯呑み無いが、あんた知らんか？」「そんなン、知りまへん」(爆笑)

葛西 ヘー、土佐廣さんは気が強かつたんですね、お小さい頃から。

土佐廣 負けん気だつたんですねえ。とてもその人に謝まるのがいやでね、それで。(笑) 普通でしたら、そういう用したりなんかするのを、まあ一年か二年はやらんならんなのですけど。始まりの時は、お客さんが一人か二人しかいませんけど、ツナギ太夫、ツナギ太夫言われて、ツナギやてる時は、いっぱいですから。それに、ミナミの席へ出ましてからは、一ぺんに上ってしまいましたんで、あんまり、他所の人みたいに用事したりなんかする期間が少なかった訳です。

吉川 文楽なんかで、わざと病気になるって若い人に代役させて出世させるというような事がチイチイあったと聞いています。まあ、土佐廣さんの場合のツナギはそういう意味ではないかもしれないが、結局はそういう事になった。そのつながりしてくれた人、遅れたりなんかした人が、土佐廣さんの恩人みたいな人じゃないかと思うんですけど。(拍手) 土佐廣 まあ、そういう事でございませぬ。

東と西

葛西 それで、ミナミの「竹横」から評判を呼んで全国を巡業したり、あるいはもう大陸まで興行にいらっしやって、大正七年に東京

にお出になりました。その当時、東京と大阪と、席の感じ、雰囲気は違うものでしたか。
土佐廣 え、アノ何ですか、自分の口から言うたらおかしいんですけど……（東京は）満員、超満員でした。

吉川 お客様は拍手したり、掛声したりするんですか？

土佐廣 いえ、その時分はね、もう「ドースル」なんて言う人、絶対ないんです。手エたいたいても「シィッ、シィッ」って言われてます。お客さんが変ってきたんですね。

吉川 大阪ではどうでした？

土佐廣 え、所は手エたたきます。

吉川 悪い所はどうですか？

土佐廣 悪い時は、だまーって聴いてて「（間）ヘタやなあ」なんて言います。（笑）

萬西 聞こえるように言う訳ですね。

土佐廣 え、声枯らしましてね。で、節なんか言えない時がありますと、ちゃんと黙って聴いててね、「（間）ヘタやなあ」。そりゃあ、やっぱしとても気になりますけど、勉強になりますね。

萬西 逆に鍛えられて。

土佐廣 え、神戸にはね、よう耳のある人なんですけど、必ず見えてすぐ前に座って、で、気に入らんとスィッと後ろ向いてしましましてね。それで、だんだん、まあ少し良くなってきたなと思うんでしょね、ぼつぼつ、ぼつぼつこち向く事もありますんです。それで、とても良かったって思う時には「有難たいッノ」っておっしゃるんです。

で、その人の事を「有難やのおじいさん」って名前つけて。（笑）「今日、有難やのおじいさん来てる？」って。みんな、こわいんです。ちょっと耳があるんで、なかなかよう聴くんです。ですから、どこでも手エたたくって訳でもないんです。いいと思わなければたたかないんです。やっぱし文楽がございましたから、耳が肥えてまして。

吉川 その点、東京の方が少し色っぽく語ったり、サワリだけ語ったり、大阪と違うんでしょうね。

土佐廣 そうですね、見台をこうしてたたいたりね。「クリ上ゲ」なんていう節がございますんですけど、何とか、エーエ、エ、エ、エ、（と見台をたたく）、エ、エ、エこんなこというから。「ドースル、ドースル」って言いたいような言い方するんです。（笑）

うちの師匠の三味線弾いてました吉兵衛って師匠が、「クリ上ゲ」という節は、嘆きの絶頂についている節だ。あんな所で手エたたかす者はドベたや。絶対、あんな所で手エたたかしたらイカン」と、よう言われました。

そういう風に違うんですね。節を、一つ廻したらえ、所を、又もう一つ廻したりね。それで、それが「ドースル、ドースル」と言わんならんような言い方になるんです。ですから私、東京へ初めて来ました時、「東京の人の義太夫は随分違うなあ」と思いました。今は、そんな事やってる人はありませんけれども、その時分とは大分違いますね。

萬西 東京でも人気絶頂で、その当時という

プロマイドのような物が出たんですって？

土佐廣 表にね、こんな大きな、タタミ一枚くらいの写真を出しまして。で、団司さんの事は「女越路太夫」、私の事は「女伊達太夫」なんて書いてあって。それで、雷門の岩おこし屋の屋根の上に、あれ、何と言うんでしょか。その当時、パターン、パターンと変わる、活動写真みたいなのがありました。「一直」ですとか、「草津」、それからお汁粉屋の何やという所やら、浅草の名物ばっかし……広告ですね。その中に、私がこうしてお辞儀している写真が出たりしてました。え、はたち位の頃でした。

初めて東京に参りました時は（大正七年）

二ヶ月交代ですから、七月八月とおりまして、エライ大入満員でした。八時に割引する鈴が

なりますとね、一ぺんに入ってきて、もう一ぺんに満員になってしまいます。割引になつてから真打が聴けるんですから、それまで表にずいっと並んで待ってる訳なんです。そんなんで大変に評判が良かったらしいんで、職

とか幕、フラフっていうんでしょか。

萬西 旗をフラッグって、フラッグなんですよ。

土佐廣 それから「神代旗」っていう、優勝旗の大きいみたいなものなんですけど、天井こう、はわしましたりね。そんなのを沢山、何でも貰いまして、帰りには行李いっぱい。（笑）

それで又、十二月に参りまして、その時のしまい位に結婚の話がありました。

結婚・子供

葛西 その頃は、「結婚したら引退」ということだったんですか？

土佐廣 え、まあ、自分ではやめたくなかったんですけど、子供が出来ましたから、しよことなしに。したら主人の姉がおりまして、「あんなにやかましく出てくれ、出てくれいって来はんのやよって、出たらいいでしょ。私が子供見上げるから」って。それで、こっちもまあ、家で子供の面倒見てるより、語ってる方が面白いもんですから。(笑)で、また出るようにして、パテー館の終り頃まで出てました、随分長いこと。

葛西 三人お嬢さんがいらっしやいますけど、お腹に赤ちゃんがいる時にも床にお座りになったという事ですが……

土佐廣 アノ、赤ん坊がお腹にあります時は、お腹強いんです。とてもやりいんです、お腹強くて(笑)。その代りに、出てしまったらば(笑)ダメ……

吉川 腹帯は？

土佐廣 そんなもん、しなくても……

吉川 赤ちゃんが突っ張って。(爆笑)
土佐廣 どういう訳かわかりませんけど、とてもお腹強いんです。普段なら、腹帯をぎゅっと締めなきゃ笑えないんです。そんな所でも笑えましてね。その代りに、出てしまったらもう……。(笑)

葛西 そういうものでございますか、はあ。
土佐廣 子供が三人もおりますけど、もう難しいので、もう懲りましたんで、もうこれは

私一代でやめた方がいいなど、しまいに思いました、誰にも教えませんでした。

吉川 残念だったですね。

葛西 一代で、御自分だけでっていうのは、どういう点なんでしょう。世襲制ではありませんが、お子さんに継がせなかったのは？
土佐廣 え、自分が学校へ行かなかったことをエライ悔やみまして、学校へやらなきゃいけないっていう頭が一つと、それから、あんまり流行っておりませんでしたから。その時分、素人の方は随分流行ってまして、貸席があっちにもこっちにもございましてね。毎晩々々素人の会がございましたけど。
吉川 まあ、義太夫ですだけの苦勞を、他の方でする方がいいってことですね。
土佐廣 え、何しろ十年経ちましたもね……

大序会

土佐廣 この見台に「大序」って、丸くして紋にしたものがございます。これ、師匠から頂いた見台ですけど。

葛西 土佐太夫さんですね。

土佐廣 え、「大序会」っていいものは、大序の中にも大変見込のある者がいるのに、頭がつかえて、そこから上る訳にいかないからっていうんで、師匠がこしらえまして、そして、中で「この人はえ」とか「よくなる」とかっていうのを抜擢して、構わずに役をつけてやらせる。それでないと、せつかく見込のある者があってもね……月に一回ずつ師匠の家で大序会を開いて、師匠が聴いて、私はお稽古に行きますと「今日、大序会があ

るよって、聴いていきや」なんて言われて、よう聴かしてもらいました。

その中の一人だったんでしょね、こないだ亡くなった綱太夫さんが、「師匠のやっただあの『大序会』のために、私ら随分勉強になったから、あれをやってみて。師匠に報告に行くから、お墓知らせてくれ」おっしゃいましてね。本所にあるんです、分骨して。で、そのお墓教えましたら、綱太夫さん、その「大序会」になる人の一門連れてお墓参りしてくれました。

初回が第一生命でやったと思います。その時に、安藤鶴夫先生が見えてまして、大序会の謂れから何からずと話して頂いて。で、その時に、私はこんなに長いこと生きてると思いませんので(笑)もっと早く死んでしまいうつもりだったもんですから(笑)、その見台を「使うて下さい」いうて綱太夫さんに差し上げましたの。大序会に使ってもらえば、いつまでも遺りますから。安藤先生も「あなた、いいことしたなあ」言われまして、よかったなあと思っただんですけど、残念ながら三回目をやる時に綱太夫さんが亡くなってしまいました、そのまま大序会も止めになってしまいました。で、伊達路太夫さんが、家へよく来るもんですから「あの見台どうしたかしらん」て聞きましたら、「あれ、家に預ってますねん」て。「なら私、まだ生きてるらしいから、もう少し私に使わして頂戴よ。」って持って来て貰うて、いまだにこうして使っております。

葛西 その湯呑みを見せて頂けますか？

土佐廣 お師匠さんが毎日、これでお番茶をあがってました。お番茶のほかは、お薄ばっかり。え、これはもう随分古いんですね。大正時代からずっと使ってたんでしょね。亡くなりました時にね、「お師匠さんが一番身近く使ってた物を下さい」とって言いましたら、奥さんが、「なら、あなたにこれ上げるわ」といって、これ頂いて……。

ここに銀で大きな、立派なふたがついてたんですけど、戦争の時に供出がございましたねあの時、出してしまいました、惜しいことしたと思っております。

ライバル

吉川 例えば、貞奴には松井須磨子という競争相手、ライバルがいたわけですけども、土佐廣さんのライバルのような方は、いらっしやっただんでしょうか。

土佐廣 ございました。大阪にね、三蝶さんという人が。大阪っていい所はね、「あのより私の方が上や」と思うと、「あの人の前やんのいやや」とってことになるんですね。そうすると、こっちも越されるのいやだから「いやや」とってこと。と、一日交代になりましてね、毎日こう、前やったり、後やったり、そうして争うんです。その時はもう、死にものぐるいですね、一所懸命。そして結局、勝った方が上になってしまいうわけです。で、今度は他の席へ行きましても、一ぺん前語った人に、自分がぬかれるってことは、とても

恥っていいですか、いやっていいですかね。

三蝶さんという人と、子供の時分に私いっしょに出てまして、私の一つ前、三蝶さんが語ってたんです。で、三蝶さん、お金が沢山あったんで、文五郎さんなんかよう頼んで、自分で「三蝶」とっていろいろをやったり、大部まあ発展して。それで、今度、私の前をやるのはいやや。で、私もとうとう三蝶さんの会は出ませんでした。

吉川 お年は、向こうの方がお上ですか？

土佐廣 おんなじくらいでしたけど、早く亡くなられました。

語るな、語れ。語れ、語るな

葛西 全部で十二人のお師匠さんにおつきになったそうですが、全部男性のお師匠さんですね。

土佐廣 え、大阪におります時は、うちの師匠、それから源太夫師匠ね、これは今の織大夫さんのお祖父さん、それから三三三さんというお師匠さんがいらしたんです。

葛西 その沢山ついた中で、お稽古を始めて一段上げるのに一番時間がかかったものは何でございましょう。忘れられない……。

土佐廣 そうですね、大阪で稽古してました時より、東京へ来まして、パター館やなんかで人氣のありました、その後の方が、だんだん、だんだん難しくなってきましたね。それで香伯師匠なんかには、「浄瑠璃は『語るな、語れ。語るな。うたえ、うたうな。うたうな、うたえ』こういうこと、頭おいとき

や」とってよう言われました。それから「泣く、

「笑う」ね、これはもう無論のことなんですけど、「苦しむ」とか「喜ぶ」とか、「驚く」「騒ぐ」こういうことをちゃんと頭においてなかったら浄瑠璃は語れないって、そういう事も言われましたし。それから「世話に時代あり、時代に世話あり。節に詞あり、詞に節あり」こんなこと、みんな頭おいとかないかんでって言って、教えて頂きました。

東京へ来てからは、四代目の清六師匠にも、綱造先生にも随分稽古して頂きましたし。それから、うちの師匠が亡くなってから、吉兵衛師匠がこっちへ稽古に見えてましたんで、随分やかましく言うて、厳しくお稽古して頂きました。それから猿之助師匠、お弟子が沢山で、赤坂にいらっしやいましたんで。ここへもお稽古に参りました。最後に、寛治師匠が亡くなる間際までお稽古に行っていました。

葛西 八十年の芸歴の中で、お師匠さんにはずいっとついていて、芸には、稽古には終りがないという感じがございませぬ。

土佐廣 やっぱし、稽古に行きつきますと、稽古に行かんと、自分がこう、やっぱし差があるように思えますんで。

吉川 稽古は、ものを書いたり見たりでなく、口とか耳とか、結局、記憶ですか。

土佐廣 え、その香伯師匠って方には、詞の間はね、「死んでる、死んでる」とって言われるんですね。そう言われたって、一寸わかりにくくて、どういうのかいなって思いましたけど、まあアノ、相手にもの言っているよ

51.8.2891

うに聞こえなくて、朗読みたいに勝手に喋っているようなことをおっしゃるんだと思うんです。「死んでる、死んでる、詞死んでる、死んでる」って。それが今になりましたね、人様のお稽古して、「あ、こういう風に私が言っていたから、死んでる死んでるって言われたんだなあ」と思って、今頃になって、よくわかります。

吉川 ホウ……。

土佐廣 ですから、よくよく義太夫っていうのは難しい……。それから「又、口で言う」って言われるんですね。「口で言わなかったら、どこで言うんがな」って、その時は思いましたけどね。(笑)この頃になったら、やっとわかってきました、「口で言う」ってこのことやな、と。「死んでる」っていうのもこのことやな、と。よくわかかってきました。何と、義太夫って難しいもんだと思います。七十年もやって、やっと今頃になってねえ。今でも、一所懸命に人様のお稽古しながらも、自分も一所懸命に稽古をしています。

倦 怠 期

吉川 今までずっと長く続けられた理由ですね、まあ天才少女とほめられたり、いい給料を貰われたり、色々あったでしょうが、一番支えてきた、止めないで八十何年がんばって来られたのは……。

土佐廣 時々、やんになりますねえ。

吉川 止めようと思うこともありますか。

土佐廣 ええ。こないだも、若い人が大勢見えましてから、自分の経験上、お話ししたんですけど、とつても自分が下手に聞こえてきましてね、どうしてこんな下手なんだ、止めたいなあと思うことが、結婚してからも、ちょいちょいございましてけど、その時が、自分が下手に聞こえる時が、上がる境らしいです。それで、まあ、止められないから、しょうがないから勉強しますねえ。それで、そのうちに、「あ、ここだ。あ、そうだ」というようなところへ勉強するから、それだけ上るわけですね。

葛西 一つずつこう、乗り越える、段階があるということですね。

土佐廣 ええ。ですからね、こないだも、若い人になら、そういう時があるから、あんたらもいやにならなってきたら止めなさんなって、せっかく十年も修業したんだからって。これから必ず、自分がいややなあ、自分が下手に聞こえてくる時が必ず来るから、そういう時が来たら、土佐廣さんがこういうこと言っただけど、ここのやなあと思って、その時、止めなさんなって、そう言いましたけど。倦怠期っていうんでしょうか、必ずそういう時が来ますね。とても自分が、もう下手に聞こえて、いややなあと思う時がありますね。

壺 坂

吉川 明日語って頂く「壺坂」ですが、地唄が二つありますよね。「まゝの川」と「菊の露」と。あの二つは、同じ地唄でも違う、そ

の辺が難しいことだと思えますが……。
土佐廣 「菊の露」の方は、あれは沢市の悩み、お里のことを誤解してますからね、悩みに悩んで、もう心の遣り場がなくて歌ってるんですから……。

吉川 沢市になって歌わなきゃいけない……。
土佐廣 ええ。

吉川 前の方「まゝの川」は、一般的にマクラの様な意味で、沢市ではないわけですね。

土佐廣 そうですね。「里に住みながら」っていうところから義太夫になります。

奥は、もう一方的に沢市の気持ちに。「こりやもう、お里が可愛そうだから死んでやる」って気持ちになっているとこですけど、前は悩んでるから、その悩みが、やっぱり歌にね、出ないといけませんですね。

吉川 盲人らしさを出すということですが、その秘伝といえますか、やり方について。

土佐廣 盲人は耳が大事なんです。目が開いてますと、こちで呼ばれたら、こち向きますけど、(盲人は)こちで呼ばれたら、こち(逆)向くんです、反対に。で、耳が

とても大事なんです。耳でもの言うみたいなものですね。ですから耳を使わないとだめなんです。

吉川 じゃあ、お里の方へ絶えずこう、耳を向けなきゃいけない……。

土佐廣 そうなんです。

吉川 後の方で、沢市が笑うところがありませんね。だけど、結局、悲しみがあって笑うというので、単なる笑いじゃないという、その

あたりが難しいんじゃないでしょうかねえ。
 土佐廣 一番しいは、もう嬉しい笑いですけど。笑いっていいましてもねえ、ごまかし笑いもあるし、おかしくて笑うのもあるし、悲しいのを隠す笑いもあるし、照れくさいのを隠す笑いも、色々ありますですねえ。なかなか難しいです。

葛西 例えば、今の笑い方ですとか、色んな方を御覧になる訳でしょう、普段。日常の様子をよく観察なさるって聞いたことがあるんですが。

土佐廣 そうですねえ。テレビ見てましてもね、劇ばかり見てるんじゃないかって、あゝいう表情をしているとか、あゝいう風にいったらいいなあってこと、色々ございますね。

葛西 時間がもう、あと五、六分でございますので最後に。これまでに、芸術選奨文部大臣賞、あるいは去年も含めて勲章が二回、それから人間国宝と、様々な賞を受賞なさいましたが、一番嬉しかったのは何でございますか？

土佐廣 ま、一番最初に頂きましたのが(注。昭和46年 勲五等瑞宝章)嬉しかったですけれど。芸術選奨頂きました時も、嬉しうございましてけど、人間国宝頂きました時は、もう私にそんな値打ちがあるのかしらん、怖いなあ、これから先怖いなあと思ひましてねえ。

あ、このう、却ってこう苦勞になります。ですから、こちら(本牧亭)へ出させて頂きます時でも、自分のテープを聞きまして「あゝ、ここを直さんならん、ここもいかん、ここもだ

めだ」って、そんなことばっかり考えておりますけど。死ぬまでに一ぺんでもいいから、

「あゝ、今日はいまいこと出来たな」というような浄瑠璃語ってみたいなあと思ひますけど。何べんやってみても、お客様は「今日はよかったですよ」言われても、自分で得心できませんでねえ。うちの師匠がよく「もう自分の思うようにやれた時は死ぬねん」って、

よう言うてられましたけどねえ。本当に、師匠がおっしゃった通り、自分の思うようにやれないもんだなあと思つて、何べん聞いてみても……だめです。

葛西 御本人がよかったですと思わない方がいいわけですね、私達にとつては。

吉川 そうですね。自分で満足しては、芸は止まるわけですよ。

土佐廣 そうでしょうか。(笑)

吉川 実は、もっともとお聞きすることを留意しておつたんですけども、土佐廣さんのお話に聞き惚れて、質問を忘れてたりなんかしております、まあ、幸いに葛西さんが助けて下さいましたけれども。まだまだお聞きしたいことがございますが、このあとに演奏が控えておりますので。皆様、どうも有難うございました。

土佐廣・葛西 有難うございました。(拍手)

(副題は、掲載にあたり編集部がつけました。当日の雰囲気をお伝えできればと願つております。テープを原稿に起して下さった竹本朝代さん、どうも有難うございました。)

お知らせ

豊澤仙廣前副会長(現名誉会員・義太夫節保存会会長)より百万円、竹本越道常務理事より五十万円を、このほど御寄附頂きました。会員の皆様に御報告申し上げますと共に、紙面を借りて厚く御礼申し上げる次第です。

* * *

永年、会議に稽古にと使わせて頂いた築地の「新小松」が五月末日にて廃業されました。会議はともかく、安心して音の出せる稽古場は簡単には見つからず、六月以降は片腕をもがれたような状況。無くなって沁々とその有難みをかみしめている次第です。新小松には本当にどれだけお世話になったことか、会長の仙廣師、社長の福原一信様、また従業員の皆様、どうも有難うございました。

尚、仙廣師は、暑さを避けて東京を離れておられますが、会員の皆様にくれぐれもよろしくとの御伝言でございます。

* * *

春の叙勲で勲五等瑞宝章の榮に浴した豊澤猿三郎相談役は、五月二十日の伝達式当日には、生憎入院中のため列席が叶いませんでしたが、今では、本号に寄稿もされ、すっかり回復されましたので、御報告申し上げます。改めて、おめでとうございます。

政治と芸能

— 駒之助師の太十 —

佐々木明郎

明治元年1868の御一新(明治維新)に一応成功した明治新政府は、五年に断髮令・娼妓解放令等の各種取締令を發布したが、興行界に対しても、例えば教部省(のちの文部省)からカブキ界に、「演劇ノ類(たぐい)専ラ勸善懲惡ヲ旨トスベシ。淫風醜体ノ甚シキニ流レ、風俗ヲ敗リ候様ニテハ相済マズ候間、弊風ヲ洗除シ、漸漸風化ノ一助ト相成リ候様心懸クベキコト。」と通達し、東京府は江戸以来の三座の座元と立作者とを府庁に呼出し、「此頃貴人オヨビ外国人モオヒオヒ見物ニ相成リ候ニ付キテハ、淫奔(イタヅラゴト)ノ媒トナリ、親子相對シテ見ルニ忍ビザル等ノコトヲ禁ジ、全ク教ヘノ一端トモ成ルベキ筋ヲ取り仕組ミ申スベク候」と諭し、更に十二代守田勘弥、古河黙阿弥、四代桜田治助を第一大区役所に呼出し、「ソモソモ演劇ノ儀ハ勸懲ヲ旨トスベキハ勿論ナガラ、爾後全ク狂言綺語ト云ヘル旨ヲ廢スベシ。譬へバ羽柴秀吉ヲ真柴久吉トス、童幼若シ久吉ヲ以テ豊公ノ名ト覚へ、春永ヲ以テ織田氏ノ名ト合点セバツヒニ事ヲ過ツニ至ラン。ソノ余スベテ事実ニ反スベカラズ。アナガチ堅キヲ是トシテ洒落ヲ非トスルニモアラズ。淫哇滑稽ニモマタ教ヘトナルベキアレバ、能ク是等ヲ注意シ、外両座、他ノ作者へモ伝達アルベシ」と、役所の幹部即ち成り上がりの芋侍等

は、無教養に基づく勘違いから、全く余計なことまで指示した。こんな連中に洒落の解らうはずもない。

現代の青少年は漢字漢語を知らなすぎるが、明治の人は漢字漢語を使いすぎ、特にあて字が多い。また、近世の延長として高学歴の人までが、かな遣い(勿論歴史的かなづかい)の誤りが多い。そこで引用には、あて字はかなに、漢字は常用漢字に、漢文調表記は書き下だしにし、送りがなの不足は補った。

明治六年には教部省から文楽座に対して、一、御上ヨリ御布告ノ趣、急度(きつと、必ず)相守ルベク申スベキコト。

一、皇上様(天皇)御歴代ノ御名前マタハ差支ヘノ文句コレ有リ候浄瑠璃一切語り候儀ハ相成ラズ候コト。

一、世話浄瑠璃心中物スベテ風儀宜シカラザル場ハ能ク能ク調べノ上語り候ベキコト。

一、時代物ニモ風俗ニ拘リ候場マタハサハリナドニモ心ヲ付ケアシキトコロハ急度相除キ候コト。

一、旅カセギニ罷リ出候人ビト、ソノミギリ世話人ニ届出候トコロ、近来多ク等閑(ナオザリ)ニ相成リ、以後ハ上下ノ差別(シヤベツ)無クソノ年ノ世話人ニ届出候コト。

一、出勤中、銘銘礼儀第一ニ致シ楽屋等ニテモ風儀アシキ事コレ無キ様カツ風俗衣服等モ随分質素ヲ相守リ、芸道出精第一ニ勤ムベキコト。

との注意があった。

「太十と親の命日を知らない者は無い」と

いわれるように、昔は無字文盲の人でも浄瑠璃やカブキのことはよく知っており、特に代表的な太十などは稽古をしたことのない人も文句を知っていた。「(「オヤ?命日とはなんだろう」という現代の青年は知らない。)寛政十一年1799文月、若太夫芝居初演、近

松柳等合作『絵本太功記』十冊目、尼ヶ崎の段で手負いの老母さつきが「主君を討つて高名顔、天子將軍になつたとて、野末の小屋の非人にも、劣りしとは知らざるか」というところを、真の反骨精神の所有者であった十代目豊竹若太夫師(敢て大夫とは書かない)のように院本どおり語る人も稀にはいたもの

のほとんどの人が「譬え將軍に」と変えて語っているのに、三月二十日の月例公演で竹本駒之助師は原作どおりに語ったのは、近来の快挙であり、高く評価されるべきである。

原作を変えて語るようになったのは何故か。その遠因は明治六年の通達にあるようである。鶴澤仲三郎師所有の稽古本に「譬へ天子將軍に」とあったが、これなどは過渡期の困惑がよく象徴されており、現にそのとおりに語った人びともいたそうである。

では、他の作品にこういう個所は無いか、なぜ変更したのか、また、明治新政府の干渉は、江戸時代の代代の為政者、昭和前期(戦争中)の為政者、敗戦後の占領軍等、それぞれの芸能に対する干渉とはどんなつながり、どうい違いがあるか等、いろいろな問題があるが、紙数が尽きたので次の機会に譲る。

(ささきあくろ、社団法人義太夫協会監事)

協会の動き

昭和61年4月より
昭和61年8月まで

4月29日 豊澤猿三郎相談役(義太夫節保存会監事、重要無形文化財総合指定保持者) 勲五等瑞宝章

中村盛雄氏(よしや、無形文化財技能保持者) 勲五等瑞宝章

昭和60年度民間芸術等振興費補助金(青少年等芸術普及事業) 額の確定通知

4月30日 昭和三十九年度民間芸術等振興費補助金(青少年等芸術普及事業) 額の確定通知

5月6日 経理部会 於弥乃太夫宅

5月10日 資料・記録部会 於事務局

5月12・13・14日 女流後継者育成事業 野崎村・葛の葉研修(野澤勝平(指導) 於国立劇場稽古場)

5月16日 定例理事会、推薦会員として、田辺秀雄・景山正隆両氏が承認された。永年お世話になった「新小松」での最後の理事会となった。

5月17・18日 女流後継者育成事業 寺入研(修(豊竹呂大夫師指導) 於国立劇場稽古場)

5月20日 義太夫協会公演会 席上、第一回豊澤仙廣賞授与式を行った。竹本朝重、竹本駒之助が受賞。

7月11日 定例理事会 於芸団協会議室

7月12日 資料・記録部会 於事務局

5月21日 義太夫協会公演会 鶴澤津賀寿(駒之助門下) 初舞台 於本牧亭

5月24日 女流後継者育成事業 三番叟研修(野澤錦糸師指導) 於国立劇場稽古場

5月28日 義太夫教室第39期(初級入門コース) 開講 47名が受講 於銀座三丁目東町会事務所

6月9日 選挙管理委員会 於文明堂

6月13日 公演部会 於事務局

6月20日 新入正会員審査委員会 於本牧亭

6月20日 義太夫協会公演会 八王子車人形参加 於本牧亭

6月21日 教師のための義太夫講習会 於本牧亭

6月24日 定例理事会 於文明堂

7月1日 選挙管理委員会 於文明堂

7月6日 定例理事会 於文明堂

7月6日 義太夫協会昭和61年度通常総会 於文明堂

7月6日 吉川英史会長辞任、名誉会長に。新たに田辺秀雄新会長が就任した。(174頁参照) 於文明堂

7月20・21日 義太夫協会公演会 20日は、竹本綾貴世(猿之助門下) 初舞台 於本牧亭

7月23日 常務理事会 於文明堂

7月23日 義太夫教室第39期(初級入門コース) 閉講式 37名卒業 於文明堂

8月7日 新橋演舞場別館、稽古場スペースアルファ落成式。副会長他参列。

8月12日 会報第38号発行

よしや中村盛雄さん叙勲!

去る四月、義太夫界三味線の殆んどが世話になっている、よしやさんこと中村盛雄氏が勲五等瑞宝章の栄に輝きました。よしやさんは、既に無形文化財技能保持者に認定されておりましたが、此度びの叙勲は大変喜んでおられました。

五月二十日の伝達式に東上され、翌二十一日昼、新幹線に乗るべく東京駅に着き、エスカレーターに乗ったところ、前の人が転び大怪我をし、よしやさんはそれを介抱しているうちに、自分も気分が悪くなり倒れ、二人共救急車で病院に運ばれました。よしやさんは血圧も上り、又、余病も出て、実に四十日間も入院ということになりました。六月三十日に寝台にて帰られ、大阪で入院されています。もちろん仕事は無理で、かなりの期間の加療が必要と思われます。

よしやさんのお祝いと共にお見舞を申し上げます。(綾太夫)

入院先 大阪市西成区まちだ胃腸病院 306

教師のための義太夫講習会

△アンケートより▽

昨年11月21日に行った「教師のための義太夫講習会」は、先生方の参加者113名という記録を作りました。国語71名、音楽11名、社会10名、その他視聴覚教育担当の先生等でした。内78名は、当講習会に初めて参加した方です。当日のアンケートよりいくつか御紹介いたします。○内は教科、数字は「義太夫節を聴くのは何回目か」を表わします。

○当日の内容は、講演「義太夫節の芸術理念、その魅力」景山正隆 演奏「酒屋」土佐廣・重輝、実演「八王子車人形のつかい方・櫓のお七」西川古柳一座



「酒屋」 竹本土佐廣・鶴澤重輝
(撮影 佐藤公夫氏)

演奏について

○これはもう凄い。芸ひと筋に生きてきた人の存在がグリーンと迫ってきて、わが身の血が湧いてきた。八十歳をすぎてもこんな声が出るとは、畏れ入りました。(音楽・2)

○当時では、ずい分ナウク、リアルであったことがわかりました。テキストがあっただけではありません。(社会・初)

○演技者が全身を使って演じていたのにはビックリして、テレビ・ラジオではない生の迫力が伝わってきた。(大学生・初)

○義太夫というのは、観客も想像力を駆使して参加するものですね。(国語・2)

○ライブは違うの一言です。三味線も素晴しかったです。(音楽・初)

○余りに面白いので驚いた程です。声の深味、調子の変わり様、人情あふれる語りにはひき込まれました。義太夫の魅力を知るに十分な経験であると思います。(国語・初)

○咳こみ咳こみ語る所、本当に真に迫って、血を吐く思いと申しましようか、而も瞬間にパツと静まる変化の見事さ。(社会・2)

人形について

○色々な工夫と、その操作、少しの角度で表情の変る面白さと、人形の顔の美しさが心に残りました。(国語・初)

○これだけ世の中が機械化されているのに、人間の手になる人形劇が、今でもこれだけの感動を呼ぶとは……江戸時代の人が、これに魅せられたのも当然と思う。(音楽・2)

○ふだんは隠されて見られない手足の動きを懇切に説明して頂いたので、どのように人形が動くかがよくわかった。歴史の長さを感じさせられた。(国語・3)

その他

○歌舞伎は男しかいないのに、今日は女の人も出ていたので、少し変な感じがした。でも、色々と新しいことが知れて良かった。(学生・初)

○前に、中学の鑑賞教材に義太夫節(卅三間堂棟由来)があらわれたとき、われわれ音楽教師の間では、困ったことになったとバニク状態に陥ったことがありました。私も全然義太夫節は知らず、どうやって生徒に教えられるのかショックでした。しかし、これではならぬと、それから国立小劇場に文楽を鑑賞に行くことにして、それからは何ヶ月に一度という割で、せっせと随分見てきました。(今でも半年に一度か二度見えています。そして何とか(義太夫が教材に載っている間は)授業をやってきましたが、実は本当のところ、義太夫のよさが、今でもよくわかりません。国立小劇場の「文楽鑑賞教室」にも随分たくさん通っているのですが、なかなかモーツァルトやヴェルディのオペラのようにはわからないのです。今回の、ちょっとわかった気がしましたのは、解説のおかげや、人形なしの演奏のせいかもしれません。遠方なので、毎回来られるかどうかわかりませんが、なるべく参りたいと思いました。(音楽・?)

重造師の米寿を祝う会

去る五月二十六日夜、国立劇場演芸場にて「四世鶴澤重造師の米寿を祝ふ会」が開かれました。重造師は、大正・昭和の数多の名人上手の相三味線をつとめられ、戦後は、渡米されて海外普及や、東京の義太夫界に力を尽くされ、特に当協会の理事・監事を永年つとめられ、後進の育成に大いに貢献されました。文案に復帰されてからは、最長老三味線として、その指導にあたられました。先年、舞台を引退されましたが、ここ初めてたく米寿を迎えられ、その会が開かれたことは、誠に喜ばしいことでした。当日は、お体の具合よろしからず、お見えにはなりませんでしたが、誠に盛会で心あたたまる会でした。早く回復され、益々の御長寿をお祈りする次第です。

当日の演目は、三番叟ー女流若手 壺坂ー朝重・重輝他 座談会ー吉川英史・呂大夫・浅造・朝重 四季の寿ー呂大夫・嶋大夫・團六・浅造他の皆さんでした。

尚、座談会では、吉川先生の司会により、重造師のお人柄、そして斯芸に対する造詣の深さ、また渡米のいきさつ（それによって御子息が大学に入られたこと）その他エピソード等語られました。丁度その日発売された国立文楽劇場調査養成課編の、吉川先生が聞き書きされた「文楽の三味線ー鶴澤重造師」の紹介もあり、（その後、ロビーにあった百二十冊が全部売り切れしました）とても楽しい座談会でした。世話人は、重輝・呂大夫・浅造・朝重の諸氏でした。

（綾太夫）

 文楽の三味線 *****
 鶴澤重造師 御紹介

もともとは、文楽研修生のためのテキストとして作られたものですが、聞き手・吉川英史氏との対談形式のためか、楽しい読みものでもあり、また初歩から高度な専門知識まで得られるという魅力あふれる本。重造師の声が聞こえ、身ぶりが目にうかんできます。

内容は、入門、修業、三味線とその扱い方、口三味線と朱・豆弾き、三味線の弾き方、掛け声について、息（呼吸）のこと、腹帯・砂袋・調子、人形遣いと三味線弾き、太夫と三味線弾き、名人の思い出話、私の芸歴（初舞台から退座まで）

一、〇〇〇円

義太夫協会でもお取次いたします。御希望の方は事務局までお申込み下さい。

義太夫教室第39期

初級入門コース終了

定員の40名を7名もオーバーして開講した義太夫教室の初級入門コースが終了しました。皆勤16名。今年も女性が多く31名、男性は16名。20代のお勤めの方が多いというところ三、四年と同じ傾向でした。アンケートからいくつか御紹介いたします。（順不同）

○アツという間の二ヶ月でした。初めは、私に義太夫が語れるかと不安でいっぱいでしたが、赤信号と同じで、皆で語れば恐くない。

い。講義一時間、実習一時間の経過の早いこと。八時四十分がうらめしい。

○義太夫の面白さがやっと少しわかりかけたところ。これからは文案や歌舞伎も今までは違った見方ができると思います。

○三味線の実習は全くうまうまきませんでしたが、右小指にタコのようなものが出来て驚きました。

○こんな講習がもう四十年も続いていたこと、全然知りませんでした。若い方が沢山でしかも熱心なので感激いたしました。

○全くの素人ですので、最初に声の出し方から指導して頂きたかったと思います。どのような姿勢でどのように声を出すのかなど余りお話がなかったように思います。

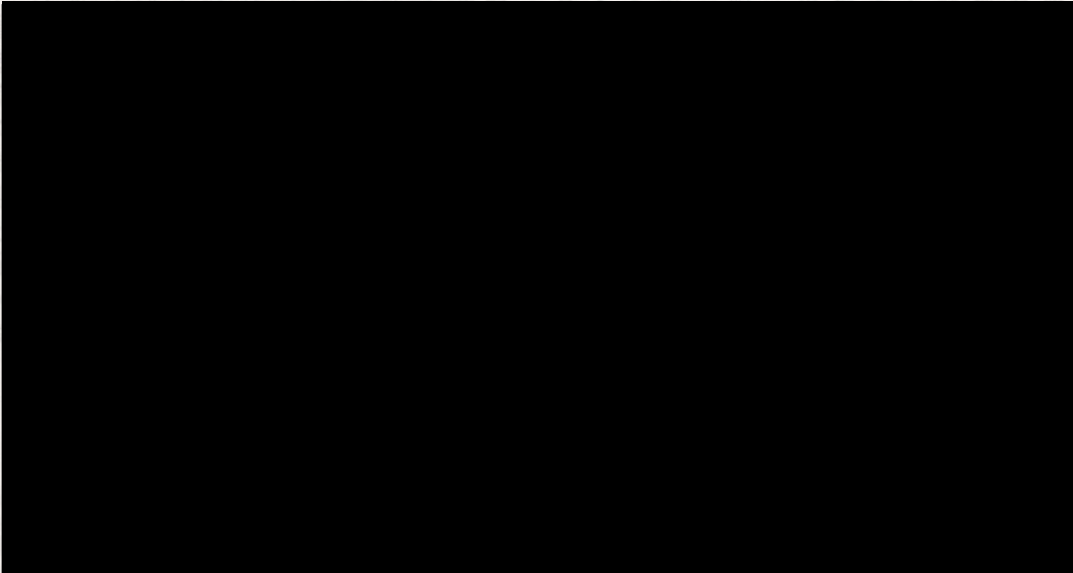
○洋楽のクラシックもわからない人が大半です。もっと日本の古典を音楽学校でとりあげてほしいですね。本当は子供の時から聞かせるべきでしょうか。マスコミがもっと取りあげてくれるといいのに等々、いろいろと思ひ悩みます。

○廉価な受講料にも拘らず、親身なご指導、本当に有難うございました。「音調基本」に関しては、目からウロコの落ちる思いで受講いたしました。

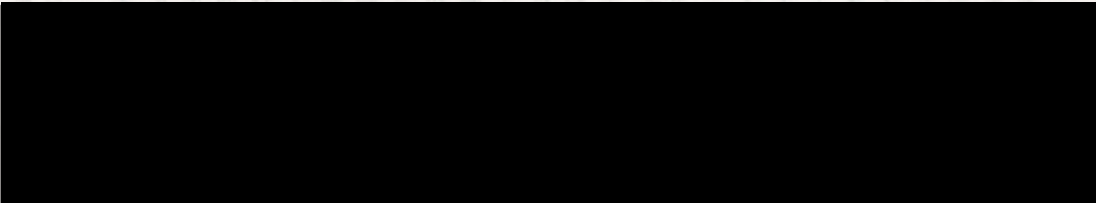
○今まで漫然と聞いていた義太夫に対する基礎的な知識を吸収でき、少しずつ良い観客になって行くような気がします。

○何より素適な経験は、大声を出すことの気持ち良さやバチを持つことの痛さを身をもって体験できたことです。

***** 新入会員御紹介 *****



***** 住所等変更 *****



会員名簿発行にあたり
御協力お願い

役員改選も終了いたしましたので早急に会員名簿を発行したいと思っております。つきましては、住所(住居表示)の変更の方、入会希望の方は、事務局まで御一報下さい。(九月末日切)
尚、広告欄もございまして、御希望の場合は御相談下さい。

寄贈

- 豊澤多美子氏 文具類 多数
- 豊澤 仙廣氏 見台 一台
- 竹本 染登氏 テープ(新口村他) 多数
- 豊澤 瑩緑氏 アガリ糸 三本

お願い

毎月の本牧公演御案内や、折々の御案内、会報等の郵便物は、極力お手渡しするなど、経費節減にとめたいと存じます。本牧公演の折に翌月の御案内を差し上げた方には、改めてお送りいたしませんので、どうか御了承賜りますようお願い申し上げます。

編集後記

残暑お見舞申し上げます。

吉川会長就任の時の会報が創刊号で、田辺新会長就任の本号が38号、16年の間に少しずつ頁数も増えて、内容も多彩になったと自負しておりますが、いかがでしょうか。年三回の発行ですから、ニュース性は乏しくなりますが、後々の記録としてお役に立てば幸いです。